

○九番（錦織淳二君） 平成二十四年第一回港区議会定例会にあたり、港区議会みんなの党の一員として質問させていただきます。

「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず」。日本人ならだれでも知っている名言ですが、福沢諭吉が言ったのは、皆が平等ということではありません。人は皆、身分の差、貧富の差を持って生まれてきています。その差をなくすために学問をしなさいということです。ゆえに『学問のすゝめ』の冒頭に書いてあります。次に彼は、「人は生まれながらにして貴賤貧富の別なし。ただ学問を勤めて物事をよく知る者は貴人となり富人となり、無学な者は貧人となり下人となるなり」と言っており、万人に対して教育の必要性を説いております。

私がかねてより「国力の原点は教育にあり」と思っており、今定例会におきましては、教育問題について高橋教育長に質問させていただきます。

さて、区議になってから初めての新年を迎えましたが、東日本大震災及び福島原発事故への対応、消費増税と社会保障の一体改革、欧州の財政金融危機、その他さまざまな難問が折り重なっており、これらのことは多くの先進国における共通した問題を暗示しているように思います。それは戦後六十六年間続いてきた「成長社会」が終わり、「成熟社会」に入ったことを心していかなければならないということで、つまり、今まで教えられてきた成功例が機能しないということではないでしょうか。

私たちが育った成長社会では、両親や先生から「言われたとおりに勉強、努力をすれば、安定した人生が送れる」ということを事あるごとに言われ、小・中・高の勉強においては、必ず一つの正解を導き出すものでした。そして、迷うことなく、そのまま素直に従えば成功のルールに乗れて、記憶力がよくて頭の回転が速い人が優秀な人で、この

能力がない限り、受験、就職で勝ち抜くことは難しいとされてきました。

しかしながら、これからの新しい時代で子どもたちが生き抜くためには、この自分の頭と心で考えなくても済むような教育界で蔓延している「正解主義」「前例主義」「事なかれ主義」を払拭しない限り、自分の命も守ることができなくなってしまうのではないかと危惧をしております。

平成二十二年度決算特別委員会において、東日本大震災の際に、岩手県釜石市の小・中学校の生徒が「釜石の奇跡」を起こしたお話をしました。日本全国で行われている防災訓練に従って行動した多くの生徒は命を落としていますが、「逃げるときは、一人ひとり自分で考えて自分の命を救え」という三陸地方の防災伝承である「津波てんでんこ」に従って行動した生徒は全員無事に避難ができました。それぞれの人に、それぞれが自力で納得ができる道を追うことを教えることこそが、成熟社会では必要なことではないでしょうか。

教育長は、成熟社会における教育をどのようにとらえ、かつ、どのような教育改革をお考えなのでしょう。

また、震災や原発事故だけではなく、児童虐待、いじめ、自殺、ストーカー殺人、オレオレ詐欺など、昔はほとんど聞かなかった事件が増えており、非常にリスクの高い社会になっているにもかかわらず、学校で教えるリスク教育は、いまだに交通安全と防災訓練しかないのが現状です。自殺だけを取り上げても、我が国の自殺者は十四年連続で三万人を超えており、年間自殺者数は交通事故死者数の五倍以上で、悲しいかな、子どもの自殺も多いのが現状です。さらに、自殺未遂者は自殺者の十倍以上いると推計されております。このようなリスクの高い社会においては、場当たり的ではなく、系統だった教科として、事件の加害者、被害者になる心理や、情緒安定の自己制御の方法を、教室でのロールプレイング等により、リスクを低減・回避して生きる知恵を学習させる必要があるのではないでし

ようか。

四月から中一、中二の保健体育で武道の授業を取り入れ、港区では指導者と費用の面で「柔道」を選択する学校が多くなるように聞いておりますが、学習指導要領を見る限りでは、①技ができる楽しさや喜びを味わい、基本動作や基本となる技ができるようにする。柔道では、相手の動きに応じた基本動作から基本となる技を用いて投げたり、押さえたりするなどの攻防を展開すること。②武道に積極的に取り組むとともに、相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を守ろうとすること、分担した役割を果たそうとすることなどや、禁じ技を用いないなど健康・安全に気を配ることができるようになる。③武道の特性や成り立ち、伝統的な考え方や、技の名称や行い方、関連して高まる体力などを理解し、課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする、としか記載がありません。

これでは、私が四十七年前に受けた武道の授業と同じです。武道も我が身を守るリスク対応訓練です。「我が身を守って生きる」というリスクに関する知識と回避術としての授業もしない限り、授業の安全対策が不十分になってしまっているのではないのでしょうか。

それが証拠に、名古屋大学の内田良准教授の調査によると、中学・高校の柔道事故で死亡した生徒は、二〇一〇年度までの二十八年間で百十四人もおり、年平均で四人の尊い命が失われています。また、後遺症が残る柔道事故は二〇〇九年までの二十七年間で二百七十五件あり、うち三割が授業中で、中学・高校ともに死亡事故の五割以上は一年生で、初心者が多いというデータがあります。

フランスでは、柔道人口が日本の三倍の六十万人数ですが、フランス柔道連盟の報告によると、練習中による十八歳以下の死亡事故は二〇〇五年以降ゼロです。指導には国家資格が必要で、安全への考えが共有されているのはもちろ

んのこと、礼儀作法だけではなく、我が身を守るリスク対応訓練としての考え方が徹底しているからではないでしょうか。同じく、米国、英国、カナダ、ドイツ、オーストラリアの柔道連盟の報告においても死亡事故はゼロです。

ちなみに、学校リスク研究所の調査によると、二〇〇〇年度から二〇〇九年度の十年間の全国中学生十万人当たりでも六・四倍の高さとなっております。全国柔道事故被害者の会は、柔道必修化準備状況への危惧として、次のことを挙げています。

- ① 多数を占める急造指導教諭の専門知識不足・経験不足。
- ② 安全を確信できぬレベルのカリキュラムや指導方法。
- ③ 柔道事故発生時の指導教諭の対応力不安。
- ④ 事故の情報収集・分析の仕組みがない。

以上ですが、教育現場からも柔道界からも、初心者が初心者を教えることへの不安の声が上がっているようです。教育長は、柔道の授業に対する目的と安全対策をどのようにお考えでしょうか。また、リスク教育についてのお考えもお聞かせ願います。

冒頭で申し上げましたとおり、私は、国力の原点は教育にありと思っています。学校ICT環境設備に二千三百六十六万円、デジタル教科書本格導入に二千二百九十四万円の予算を計上されており、確かにデジタル化によるICTを活用した授業も必要ですが、それ以上に人としての生きざまを見出す自立教育を重視していただき、たった一回しかない大切な人生に、しっかりとした目標を持ち、ただ単に生かされている自分ではなく、生きている自分を感じる

ことができる教育をしていただきたいと思っています。

そのためには、まずは自分の命を大切にし、人の命を大切に作るホスピタリティ・マインドを教えるヒューマン・コミュニケーションの授業に注力していただくとともに、日本の社会でよくありがちな「困っている人はお上が助ける」という考えを払拭させるために、自由主義国家で生きるものとして、常に強い者が弱い者を助けるといった基本的な考え方を徹底すれば、一時的な同情ではなく、真のボランティア精神が育成され、自殺、いじめ、不登校などの問題が少なくなり、震災復興や介護問題や年金制度その他においてもうまく事が運ぶようになるのではないのでしょうか。教育長は、ヒューマン・コミュニケーション教育に関して、どのようなお考えをお持ちでしょうか。

また、私は、小・中学校の研究発表会にはすべて出席させていただいており、そのたびに先生方の熱心な研究発表に頭の下がる思いですが、私が見る限り教育現場と実社会の価値観に少々ギャップを感じております。例えば、一月二十日に行われました三田中学校の研究発表会で、会社が求める力、会社が重視している力として、選択肢が「積極性・責任感・基礎学力・実行力・コミュニケーション能力」の五つで、正解は「コミュニケーション能力」ということでした。ところが、今、企業で一番求められているのは「リーダーシップ」であり、その要素となる自立心、協同性、コミュニケーション能力が重要視され、それを探るために面接をし、入社後に社員教育をしている次第です。ぜひ、これからは教育界における理論だけではなく、速いスピードで変わりゆく実社会に合った、よく言えば逆に一歩先を行くぐらいの感性で教育をしていただきたいと願う次第です。

そのためには、港区として、新しい時代の価値観に対応すべく、ほかとは違う新しい発想が必要です。ほかの自治体のまねの上塗りでも満足しては周囲から認めてもらえません。例えば、グローバル社会と言えば、英語教育が必

要だとはほとんどの人が考え、英語の勉強を始めますが、それでは将来企業で生き残るのは難しくなってしまう。つまり、英語が当たり前のグローバル社会なので、英語ができるのは最低条件になるからです。

先日、区民文教常任委員会においても発言させていただきましたが、港区は障がいをお持ちの方もともに楽しく、安心して暮らせるまちづくりをうたっているなら、どうして小・中学生に手話ができるような教育をされないのでしょうか。テレビニュースでも、さまざまなイベントでも、アナウンサーや司会者の横に手話通訳者はつきませんが、英語同時通訳者がつくのはまれなケースです。

しかしながら、一般的に手話通訳士の資格を取るとなると、英語の資格と同じように費用と時間もかかるのが現状です。それを皆が授業で学べば、言葉の不自由な方とのコミュニケーションがとれるだけではなく、将来における就職の際に、特にホスピタリティを要求される職場においては非常に有利となります。港区の小・中学校の生徒は全員手話ができるというだけでも、全国的どころか、世界的にも注目を浴びるのではないのでしょうか。今までの社会ではどの学校でも統一された金太郎あめ的な教育をしても、どうにか世間で通用しましたが、グローバルかつ成熟社会においては、ほかとの違いを鮮明に出さない限り、競争に打ち勝てなくなってきました。

教育長は、時代に合った実社会で通用する教育について、どのようにお考えでしょうか。

また、英語教育にも関連しますが、平成十九年度から毎年小・中学生をオーストラリアに海外派遣され、今年度は小学校六年生三十六名をメルボルン、中学二年生三十八名をパースに派遣され、次年度予算として四千四百二十九万円計上してあります。派遣の目的が「外国の自然、文化及び社会に触れさせるなどの直接体験を通して、国際理解及び国際感覚の基礎を養い、コミュニケーション能力を身につけさせる」となっておりますが、せっかくオーストラリ

アを選択したのなら、アボリジニの征服・迫害から始まった白豪主義や、日本とオーストラリアの南太平洋における戦争の歴史はもちろんのこと、捕鯨の問題も日豪の小・中学生間でディベートさせるチャンスではないでしょうか。よい・悪いではなく、相互のマイナス部分も知り、歴史の真実を知ることが本当の国際理解につながります。ただ記念品を交換して握手するだけでは観光気分だけで終わってしまい、目的は達成されません。

感性豊かな小・中学生が外から日本を見て、自国のよいところ、悪いところが少しでもわかり、日本人である自分のことを考えることであれば、これ以上の経験はありません。グローバル社会においては、これこそが必要な教育と言えるのではないしょうか。

教育長は、海外派遣の目的を達成するために、どのようなお考えをお持ちでしょうか。

質問は以上ですが、無限の可能性を持つ子どもたちの将来を大きく左右させるのは教育です。それは同時に、日本、港区の豊かな未来へもつながります。現在の教育をさらに時代に合ったよりよいものにすべく、先見の明を持つたご答弁をお願いします。

以上、終わります。ご清聴ありがとうございました。

〔教育長（高橋良祐君）登壇〕

○教育長（高橋良祐君） ただいまのみんなの党の錦織淳二議員のご質問に順次お答えいたします。

最初に、成熟社会における教育についてのお尋ねです。

まず、成熟社会における教育改革についてです。私は、成長社会から成熟社会への構造変化を踏まえると、大量生産や大量消費の「量」が重要だった時代から、一つひとつの「質」の高さが求められる時代になってきたと認識して

おります。このような時代には、まさに一人ひとりの子どもの発想力や想像力、個性を伸ばし、個に応じた多様で質の高い教育が問われているものと考えています。

教育委員会は、一人ひとりのかけがえのない存在が、自分の人生を豊かにたくましく歩むことのできる能力や資質、いわゆる「生きる力」を育成するため、基礎的、基本的な学力はもとより、国際理解、情報、環境、福祉、健康等の教育課題について、子どもたちが広い視野で考え、主体的かつ体験的に学習できる創意ある教育を推進してまいります。

次に、武道の授業に対する目的と安全対策についてのお尋ねです。

武道は、世界に誇るべき日本固有の伝統文化であり、基本的な技を習得することはもとより、伝統的な行動様式を身につけ、礼儀を重んじ、自分や相手の安全に気を配るなど、武道には人としての学びの要素も多く含まれております。一方で、生命にもかかわる事故の危険性があることも認識しております。授業では、保健体育科の教員が港区柔道会の外部指導員と連携し、安全面を重視した指導計画のもとで、技能の段階に応じた適切な指導を行ってまいります。特に受け身などの基本動作を十分に身につけさせ、安全の確保に努めてまいります。

次に、リスク教育についてのお尋ねです。

子どもたちの安全は、すべての人々が求めている願いです。現在、子どもたちが犯罪に巻き込まれたり、事故や災害に遭遇したりするなど、子どもたちの安全は看過できない大きな社会問題となっております。これからの時代は、子どもたち自身が危険に対する意識を高め、自ら身を守る力を向上させる指導が極めて大切です。学校では「防災訓練」や「交通安全教室」はもとより、「不審者対応訓練」や「情報モラル教育」「消費者教育」、そして「薬物乱用

防止教室」など、区民の皆さんや警察や消防などの関係諸機関のご理解を得ながら、自ら危険を回避する実践力を培っております。今後も、子ども一人ひとりのかけがえのない命を守るといふ共通理解のもと、子どもが危険を予測し、回避する能力を高めるための指導を徹底してまいります。

次に、ヒューマン・コミュニケーション教育についてのお尋ねです。

鳥取県などで実践されているヒューマン・コミュニケーションの授業は、心の底から人と真剣に向き合うことを学ぶことができる素晴らしい実践であるにとらえております。これまでも学校では、人とかかわりを学ぶ体験的な活動を実施しております。一例を挙げれば、学芸会では台本について真剣に話し合い、役づくりや大道具、小道具、効果音などそれぞれの役割を、相手の考えや立場を理解し合う中で決めていきます。その過程では、自分の考えを正確に伝える対話の技能や、仲間と協力・協働する姿勢を身につけていきます。完成に至るまでに、子どもの心には悩みや葛藤が生じることもあります。それらを乗り越えての劇の完成は、その達成感から、互いの価値を認め合い、人間関係の築き方を学ぶよい機会となります。今後も、教育委員会では学校とともに、子どもたちが豊かな人間性を培い、望ましい人間関係を築ける力につけられるよう、さまざまな教育を工夫してまいります。

次に、実社会で通用する教育についてのお尋ねです。

二十一世紀は、知識に国境がなく、グローバル化が進み、競争と技術革新が絶え間なく生まれる知識基盤社会と語られております。このような時代においては、自分の力で変化を乗り切り、積極的に他者とかかわることができる真の国際人を育成することが大切であると考えております。

港区では、文部科学省の教育課程特別校の認可を受け、全校で教科「国際科」を実施しており、この授業を通し

て、子どもたちは積極的に他者とかかわり、英語によるコミュニケーションを図ろうとする姿勢が身についてきております。今後も、実社会から学ぶ職場体験や社会の第一線で活躍する著名人を招いての講演会など、特色ある教育活動を推進し、自らの生き方を学ぶとともにリーダーシップや責任感、コミュニケーションによる調整能力など社会で必要とされる能力をはぐくんでもまいります。

最後に、小・中学生海外派遣の目的達成についてのお尋ねです。

派遣生にとってオーストラリアでの直接体験は、大きな感動や驚きの連続であるとともに、将来、自分が進むべき進路や生き方にまで影響を与える貴重な機会であると認識しております。小学生は五泊、中学生は六泊のホームステイ期間中、子どもたちはホストバディとともに毎日現地校に通い、オーリングリッシュによる体験授業を受けています。我が国と異なる文化や生活習慣の中で直接経験したことは、国際感覚の基礎を養うのには十分であると考えております。

ご提案のオーストラリアと日本の互いの歴史や社会問題について、子どもたち同士でダイバートの機会等を設けてコミュニケーションを図ることは有意義であると考えております。今後、現地校の意向を踏まえながら、研究してまいります。

よろしくご理解のほどお願いいたします。